

〈ミニ講演〉

## 地域とともに育つ子ども・教師・学校

法政大学教職課程センター長 尾木 直樹

どうもこんにちは、センター長の尾木直樹です。尾木直樹なんて普段めったに言わないから嘯みそうになるんですよ、いつもは「尾木ママで一す」とか言って登場するので。この多摩キャンパスの地に足をつけたのは初めてなんですが、景色もきれいだし空気もおいしいので、びっくりしました。もう勉強しかなることがないような環境だもんね（笑）。だから学生が地域でどう育つかっていうのも大事ですけれども、環境も大事ですね。

それで、今日のテーマは「地域とともに育つ教員養成をめざして」ということですが、こういうことを正面から掲げてシンポジウムをやるというのは、あまりなかったと思いますね。“地域とともに育つ子ども”というのではありましたが、今回は大学生の教員養成ということで、テーマだけでも意義があると思います。やっぱり学生も地域の住民の一人だし、大学も地域の中のキャンパスなんですよ。普段からどのように地域と交流しているか、地域に貢献しているかが問われます。市ヶ谷のほうでも色々なゼミが神楽坂地域の聞き取りをやったり、まちおこしに参加したりしているんですけれども、今日は多摩キャンパスでの皆さんの活動を勉強させてもらおうと思って来ました。それで、理屈的なところは次のプログラムで実践家や先生方からのお話があると思いますので、僕からはざっくりと、全国的な動向をお話ししておきたいと思っています。これは必ずしも学生が教員養成課程でどう育っているかという枠組みではないのですが、学生や地域の方々がウワーっと盛り上がっているようなところをいくつか紹介

しますね。

一つすごく面白いなと思っている実践でいますと、地域ぐるみの学び合いの場として、たとえば愛知県の私学によるサマーセミナーがあります。今年は高校生が立ち上げたものも含め、市民参加で行われる講座が1,500もありました。集まった市民は55,000人。今年は最大規模だと思います。しかも毎年増えている。僕も何回か講演会をしたり準備に関わったり、お手伝いなんかで入っていますが、凄まじいパワーです。

また、愛知県の高校生フェスティバルには、県内に55校くらいある私学の75%が参加しています。それぞれの高校で土曜日ごとに高校生や地域のお母さん方が集まっています。その中で、かなり年配のお母さんに会ったものですから、「自分のお子さんが卒業されて何年目ですか」と聞いてみたの。そうしたら何年目って言ったと思いますか。答えは「19年目」。PTAが終わってもまだ来ている。義務感じゃないんですよ、ここがポイント。義務感じゃなくて、自分が楽しいから押し付けてしまうの。そして子どもたちの学習支援なんかもやっちゃう。そういう人がわんさかいるんです。それで55,000人も集まっちゃう。それから、仲間がお金がなくて中退していくということがリーマンショック以降は次々見られたわけですけれども、そうするとこの高校生は1億円募金プロジェクトというので駅頭に立ったりあちこちで色々なイベントをやりながら、友達を救済するために自らカンパ活動をして、一億円集めちゃう。そういうパワーはどこから出てくるのかという

と、普段の学校での学びだし、先生方との関係だし、保護者との関係、地域との関係の中で起きてくるんですね。東海地方は大きな地震が来たら大変な打撃を受けます。でも地域は高齢者ばかりでしょう。そうしたら誰々の家のじいちゃん、ばあちゃんは何年何組が救済に入るというマップを作ってみる。そうやって、本当に地域と一体になって、地域とともに生きています。

それから、愛知県のいわゆる進学校の東海中学高等学校は、東大医学部の合格者数が全国ナンバーワンと言われていますが、ここは受験勉強は全くやっていないんです。たとえば3.11直後から金曜日の夜に生徒や先生方、お母さん方がバスで被災地へ入って日曜日の朝帰ってくる。どんどん被災地に入っていくんですね。すごい活動力と機動力を持っていて、機敏だし、世の中の動きに的確に噛み合っていくような、そういう素晴らしい学校なんです。その中で生徒たちはモチベーションというか、おれは何のために生きようかということを探していくんですね。この東海中学高等学校は、今度映画化されます。「ベルサイユのばら」ってあるでしょう、「ベルばら」。あれを男子校で、男だけで演じるんです。演出も衣装も地域の方々や親たちと総動員で作上げる。それがあまりにも素晴らしいので今度映画になっちゃうくらい。約1,500ある席がここ8年くらい連続満席です。東京から鑑賞に行かれる方もいて、チケットは手に入らない状況です。そこまで高いレベルで、しかも演劇部とかではないの。生徒会役員だとかのわかづくりで一気に作り上げていく。私たちはこうだ、ああだ、という喜びがあって、さあやるぜとなったら、ものすごい力を出します。皆さんもそうなんですよ。学びとか人間の成長・発達っていうのは、そういうものなんです。段階を追っているものではない。

そういう大規模な地域ぐるみの取り組みの

中で、僕が一番感動したのは、東大医学部に合格するような子と教育困難校と言われる学校の子が一緒になって準備して、弁論大会なんかをやると、高校生も会場も泣きながらなんです。上手いかどうかじゃなくて、心が皆通いあっているんです。この関係性が一番大事です。形で何をやったかということではない。大学の研究はもちろんレベルが別ですけども、心、つまり感性が育たなければ、それは教育ではないと思います。そういうわけで、愛知からはすごく学んでいます。

二つ目にお話ししたいのは、いま文科省が肝煎りでやっている学校支援地域本部という取り組みです。すでに1,500くらいあって、心配な方向に流れている傾向と健康的に発展している傾向と二通りあるんですけども、健康的な方向に向かっている例としては、近くでいうと小平市にある小平第六小学校なんかがそうですね。学校がいま必要としているところに、地域の方々が入って行って支援していくわけです。たとえば、読み聞かせのボランティア活動なんかは、1~6年生の全学級に地域のお母さんが中心になって入っています。それから、もう80歳くらいのおじいちゃんが、おれは数字が得意なんだとか言って算数の学習支援に入っている。これなんか大事ですよ、生き生きされている。表情を見ただけで楽しくなります。地域には医療費の高額負担という問題もありますが、これは予防医学にもすごく役に立っていくだろうと思っています。

そんなふうにして、学校支援地域本部というのは、PTAとは別に学校が望んでいることと地域におられる方々の専門性をとを上手くリンクさせていきます。地域の方々には皆ある意味で専門家なんです。ラーメン屋さんはラーメンづくりの専門家だし、花屋さんは花のことを、カレー屋さんはカレーのことを何でも知っている。そして学生はその中間的な位置にいますよね。とにかく体力だけはあるじ

ゃない。ゴメンゴメン、知力もあるわ(笑)。これも生かしていく。学生は発想力もめちゃくちゃ豊かだし、何よりも若いから子どもたちは大好きなんです。だから学習支援も中学校によっては地元の高校生がボランティアに入っています。そうすると、もちろん教え方は上手くないけれども、お兄ちゃんお姉ちゃんが教えてくれるという喜びの中で、ものすごく勉強が好きになったりする。その姿を見て、お母さんが思わずその学生さんたちに差し入れしたくなってくる。そして地域の関係がまた深まっていく。こんなふうにして心が動かされて、形はできていくんです。実践現場では心が動くことがものすごく重要です。

そんなことで、全然まとまらない話をしていますけれども、ボスが支配してしまっている地域もあれば、本当に市民や学生が動いている地域もあります。ぜひ皆さんも、相模原とか町田とか、八王子とかに住んでいる人が多いと思いますが、自分の住んでいる地域でどんどん地域での顔も持ってほしい。法政大学社会学部の何年生、というだけではなくて、地元の何やらもやっている、名刺に肩書をも一つつけるぐらいのね。そういう学生さんが社会的に生きる力を持っているんだろうと思いますし、そういう学生さんが次の日本を切り開いていくんじゃないかなと、そういう期待を寄せたいと思います。

ただ、この中でよく「斜めの関係」というのが使われます。この言葉は、ご承知のとおり杉並区の和田中学校の藤原先生という民間人校長が教育界で広めたのですが、それでこのあいだ釜石市に入ったら学習支援で斜めの関係を作るんだと言って、ある団体が入っておられたんですね。そこで驚きましたけれども、子どもたちを見る「子ども観」が、皆さんが受けてきた学校教育、つまり小中高時代に先生からどういうまなざしで迎え入れられてきたか、生徒会活動をやっていたか、自主的な活動をやっていたかというものが無い

状況で学習支援に入ったとき、彼らは学校の先生よりも管理的なんですね。嫌な教え方なんです、今から3分間で何をやれとか。もちろん時間を区切って生徒を伸ばしていくというような高度な発想ならいいですよ。そうじゃなくて、管理だけを要求していく、そういう姿を見てびっくりしました。やっぱりどういう視点で私たちが入っていくか。子どもから学ぼう、地域から学ぼうという姿勢がなくて、教えてやろうとか、注ぎ込んでやろうという視点はものすごく危険ですね。というのは、僕らが受けてきた教育そのものが結構管理的でしょう。そうでない先生に教わった人もいるでしょうけれども、極めて少数ですよ。そうすると、どうしようもないほど管理的になってしまう。皆さんはそうならないように気を付けてください。

さて、もう一つ、どういう目線が大事なのかということでも話をしていきます。千葉県習志野市の秋津小学校というところをご存じですか。この秋津の事例は本当に面白いです。何か運動が起きてきたり活動が展開されていくときには必ず中心となる人がいるんですが、この秋津の事例にもやっぱり仕掛け人がいます。それで非常に面白いのは、ボランティアの方たちが、自分たちも楽しくないとやりませんよ、子どもたちをサポートするんだ、助けてやるんだという感覚ではやりませんよと言っているんです。空き教室の鍵を預かって4教室くらい管理して、夕方の4、5時頃から、とにかく自分たちが楽しみながら来る。これがすごく成功していて、子どもたちが幸せになれて、まちが生き生きしていて、高齢になっても子どもたちのために働ける生きがいのあるまちだということで、秋津市は人口がどんどん増えています。地域でつながっていき、学んでいけるということが、地域おこしやまちづくりにつながっていくという典型でしょう。そういう事例は新潟県なんかにも点在していますが、共通しているのは、住民や学生

の皆さんが喜びを持てるような活動になっているかということ、自分の成長を実感できるかということ、これがポイントだと思います。どこまで管理できるか、指導力を身につけられるか、こんなのは200パーセント違います。エンパワーメントと言いますが、子どもたちの苦しさを受け止めて、寄り添うことで、心に元気を与え合う関係、これが一番重要です。

この秋津小学校にはサークルが20、30くらいあるんですが、たとえば木工クラブのお父さんたちが、読み聞かせをただ教卓の前でやっても楽しくないだろう、もっと演出効果を考えようということで、2、3メートルの舞台を作り、その上にカーテンを張って、それを開けるとお母さんの顔がのぞくという、こんな仕掛けを作っちゃう。それから、校長先生が、子どもたちが気楽に本を読める図書館がほしいな、なんておっしゃると、じゃあ空き教室を図書館にしちゃうということで、「ごろごろとしょしつ」なんていう1、2年生専用の図書館を作っちゃうんです。入ってみるとカーペットの上に寝転がって読めるようになってものすごく立派なの。これはプロの作品だなと思いました。どうしてこんなものを素人が作れるんですかと聞くと、一級建築士が何人もいるって言うんですよ。それに材木にもものすごく高そうなものを使っているから、そんなお金が市の給付金から出るわけないでしょうと聞くと、これはお風呂屋さんの廃材だって言うんです。もらったから無料だって。そういう色々な方の知恵や力や技を借りてくれば、あっという間にお城みたいな図書室ができてしまうんですね。

そんなことで、やっぱり人間性豊かになっていく地域社会とのつながり、教員養成の在り方を一つ考えたいと思っています。それから、人間関係、特にいじめのトラウマで、皆さん相当傷付いています。被害者であれ、傍観者であれ、凄まじいものを持っておられる

と、僕は法政のキャリアデザイン学部で授業をやっているときにすごく感じました。75%ぐらいの方がいじめに関わっているということもわかって、国立教育政策研究所の調査では90%の方が関わっているということで、日本の学校社会はいじめ地獄のようになっています。そこをくぐり抜けてこられた皆さんの対人間への不信感、信頼をもう一つ寄せることができない、コミュニケーションスキルがもうちょっとつかないという、こういうところも、地域のボランティアに入っていく中で、皆さんが助けてもらえる、成長させてもらえるのではないかと、その力に期待したいと思っています。それから、やっぱり地域で生きてほしい。この学校を拠点にして、生きる場、生活の場を広げてほしい。そのことが教師になるときに大きな意味を持ちます。いったん社会人を経験してから、なんて遠回りする必要はないと思います。学生のときにいっぱいやればいいんですよ。クリントン夫人が『村中みんな子どもたちから学ぶ教訓』という本を書いておられます。本当に子どもというのは地域の中で育つんですね。学生さんもそうだし、大学も広い意味ではそうだろうと思います。というわけで、後はこれから素敵な報告がありますので、そちらに委ねようと思います。

## 〈パネルディスカッション〉

# これからの学校・教師・地域社会

**平塚（司会）** それでは後半のパネルディスカッションを始めたいと思います。私はこの多摩キャンパスで教職課程を担当している教員で平塚と申します。この後どうぞよろしくお願いたします。いま尾木センター長のほうから発題にあたるお話をいただきましたけれども、今回のこのシンポジウムでは「地域とともに育つ教員養成をめざして」というテーマを掲げました。教職課程を取っている方もそれ以外の関係者の方も、もちろんここにいらっしやると思っています。教員をめざそうとしている学生さんや、現在既に教員をなさっている方たちもおられると思います。「教育は学校の独占物ではない」ということを、いまの尾木先生のお話の中でも皆さんに伝えていただけたのではないのでしょうか。学校は社会にとってとても大事な場所ですけれども、学校だけが子どもを育て、人間を育てるのではないし、教師だけが教育を担うのではない。では教師って一体何をする仕事なんだろう。しばしば教室の中で子どもに対して教科の授業をおこなうのが教師だと言われますし、それはそれで間違っていないでしょうけれども、いま子どもたちや大人も含めて、私たちは色々な形で傷付きながら生きていて、しくじりながら生きている。そのときに救いになる場所は必ずしも学校だけではないし、教師だけではない。そうだとすると、これからの時代や社会に生きていく教師やこれからの社会で生きる学校には、実は子どもたちの背景にある生活や社会、家族への想像力や理解がとても大事なのではないかと。様々な人たちの助け合いのネットワークの中で子どもたちが育っていくときに、教師もそのネットワークの中に上手に入りながら、周りの人たちをつないでいくような仕事も、これからは必要に

なってくるのではないかと、そんなことも考えています。

幸いこの多摩キャンパスは住宅地に囲まれており、そこにはたくさんの方々色々な暮らしをされています。ぜひこのキャンパスで学ぶ学生さんやこのキャンパスから教師をめざす学生さんたちには、大学の中だけで学ぶのではなくて、キャンパスの周りにどんな人々の営みや学校以外の学びや育ちの実践現場があるかにも目を向けながら、子どもや学校を見る目を、これまでの育ちの中で身に付けたものよりももっともっと豊かにしてほしいと願っています。

そういうことで、今日は法政大学やその近隣地域で、子ども・若者の学びと育ちの世界に携わってこられたお三方にパネラーとして来ていただいて、法政大学多摩キャンパスの周りにたくさんの豊かな世界があることを、その一端だけでも皆さんにお伝えしたいと思っております。皆さん、どうぞよろしくお願いたします。

### ◆パネラー報告：篠崎純子さん

**平塚** 最初にお話いただきますのは、篠崎純子さんです。篠崎さんはこの3月まで相模原市の小学校で教員をされてこられました。その間、普通学級も障がいを持つ子どもたちの学級もご経験されています。不登校の子どもや発達障がいの子どものも含めて、子どもたちのたくさんの傷付きや挫折に寄り添いながら、実践をされてこられました。この春からは定年を迎えられてもう一度小学校で再任用として一定のお仕事をなさりながら、その一方で中学生の子どもたちや若者たちの育ちにも関わる仕事もされておられます。そういったことも含めて、今回は相模原で展開されている

教育の実践について、お話しいただこうと思います。

**篠崎** 皆さんこんばんは。今日お話ししようと思うのは、私が勤めていた「きこえとことばの教室」の子どもたちの様子と、「中3勉強会」という、生活保護世帯の中学生たちを対象とした夜の学習会についてです。

「発達障がい」ってよく聞きますよね。本当に純粹ですごい才能を持った人たちのことを呼ぶんだと私は思っています。実際にいくつかのエピソードをご紹介します。

(イラストを映写しながら) この子はとび箱を片付けています。それで「そこ、持って」と言われたから「そこ」を持って、止まっているんです。正直ですよ。こういうときは「そこ持って5歩、歩いてね」と言えばオッケーなんです。では、次の絵です。「何やっているんだ!」というお父さんの言葉に、「弟のおもちゃで遊んでいるんだ。」と無邪気に答えます。「何回言えばわかるんだ!」と怒りモードのお父さんの言葉には、「うーん、たぶん3回目。」とか答えると思うのですが、お父さんの怒りは増しますよね。こんなふうに、言葉の裏にあるものを読みにくいんです。では、次の絵です。「この家、臭いね」と感じたままを言っています。そういうことってありますよね。でも、皆さんは言いませんよね。彼らは、本当のことを言ってしまうんです。本当のことを言うのは悪いことではないけれど、相手の方が気にしてしまいますよね。そういう相手の気持ち、言われた人の気持ちはどうなのかなということがわからないので、私は小学生には「よそのおうちに行ったときには、まずママとコソコソ話をして、オッケーが出たら言おうね」と言っています。

次に、ナツヒコという、「きこえとことばの教室」で出会った子のことをお話しします。ナツヒコはそのときの状況や相手の気持ち・立場を理解して対応することが苦手で、アス

ペルガー症候群と診断されています。新しいことや失敗体験があることには体を張って抵抗します。絶対にやらない。ときには「死んでしまえ! あっかんべー」と言って突然殴りかかってきたり、「どうせおれなんか・・・」が口癖で、机とかストーブ、給食台を手当たり次第に壊して、人も怪我させて、悲しくなって教室を飛び出して、どこかに立てこもってしまう、そんな子どもです。コミュニケーション力をつけたいという保護者の方の願いで、当時私が勤務していた「きこえとことばの教室」に通うことになり、私が担当することになりました。ナツヒコの指導をする担任のサクラ先生はいつもすごい疲労感で、『また怒ってしまった』という罪悪感に似た気持ちに苛まれて悲しい」と言っていました。私も「そうだね」と、本当に大変な中で頑張っている彼女を見ていると、その言葉しか出ませんでした。

「おまえなんか死んじまえ!」と毎日暴力・暴言が続くと、ナツヒコがキレないようにサクラ先生も子どもも、私もすごく気を遣うようになりましたが、バトルは毎日続いていました。ある日、子どもが私を呼びに来ました。あわてて行くとフルーツバスケットの最中だったのですが、もう皆やっています。椅子はひっくり返っていて、「おれの椅子取りやがって!」と、ナツヒコがヒトシくんの首を絞めています。興奮しているナツヒコをやっとヒトシくんから引き離し、「癒し部屋」になっている部屋に連れて行って、ナツヒコの怒りが収まり呼吸が収まったころ、「どうしたの?」と尋ねました。そうしたらナツヒコは「ルールまちがってる。」と私に訴えるような目で言いました。ナツヒコが「だって、うーん・・・」と言っているところに、友達のマイコちゃんが心配して来ていたので「どう思う?」と聞くと、「うん、いつもはフルーツだけど、遊び係が、今日はなんでもバスケットにするって言った。」と答えました。「勝手に

変えてよう、フルーツバスケットはフルーツなんだよ。」とナツヒコは悲しい目をして私に訴えました。そして肩を震わせて泣き始めました。友達と仲良くしたい気持ちがあるのに、突然の変更やルール理解にこだわりがあって、柔軟になれないナツヒコの悲しみが伝わってきました。私の仕事はナツヒコと皆の通訳になることかなと、そのとき思いました。

図工の時間のことです。ナツヒコは版画が上手く刷れなくて暴れました。手先が不器用だということと、版画ってどんどん変わっていきますよね、しかも初めてで、上手く刷れたか刷れなかったか、作品を見ると一発でわかっちゃう。ナツヒコにとっては難しい課題です。サクラ先生も本当に細かいところまで注意を払っていたんですけども、他の子どもの指導をしている間に、ナツヒコの版画はめちゃくちゃになってしまいました。そうなったらもう止められません。版画の台をひっくり返して、友達のを破ろうとし、それを止める友達と今度は殴り合いになっているという状態でした。給食がもう既に始まるうとしていて、給食のワゴンも来たのですが、もう彼はワゴンごとひっくり返す。それまでに2回、ワゴンごとひっくり返して給食が食べられなかったことがあったので、これはもうだめだろうと思いました。そういうときってものすごい力が出るんです。男の先生一人や二人では、とても止められない。ナツヒコは「止めるなお前！皆が悪いからやるんだ、止めるんじゃねえ！」と言って、私の手を噛んだりつねったり、足を蹴ったり。そうやってどうしてもワゴンをひっくり返したいんです。でも私は言いました。大きな声ではだめなんです、だから囁くように耳元で、「だめだ、絶対にやらせない。もう3回目はやらせない。やったあと、ナツヒコが悲しくなるから。私は知ってる、暴れたあとナツヒコが悲しくて悲しくて自分に怒っているのを知っているから、私は止める。どんなことがあって

も止める」って繰り返し繰り返し言い続けました。もうだめだっていうくらい。痛みが限界になりそうになったとき、ナツヒコの目の怒りの炎が少し小さくなりました。すると「篠崎は死ね！」と叫んで、全部の教室の壁を蹴り上げながら、どこかへ行ってしまいました。ナツヒコがこんなふうになると、すごく心が痛くなります。どうしてナツヒコの気持ちを察知して先に手が打てなかったのかと、いつも自分を責めます。

ナツヒコはもう「きこえとことばの教室」にはやって来ないだろうと思っていました。でも次の日、ドアの前に行ったり来たりする影が。よく見ると冬なのに半そで、もうナツヒコしかいません。私はナツヒコと話を始めました。版画と棒人間を描き、周りに言った言葉ややったことを簡単に書いて、「このときどういうふうに思ってた？」と聞き出していきます。やっていたこととそのときの思いが違うということに気付かせていくものです。

「この人はね、版画が上手いかなかったんだけど、何て言ってると思う？」と聞くと、「こんなものやめろ。版画は嫌いだ、木が固くってばか。俺に歯向かうやつ。」とナツヒコは答えました。「私もね、あとから聞いたんですけど、版画は誰にとっても難しいから、やる順番を説明したんだって」と私が言うと、「知らないよ、そんなこと。」とナツヒコが言いました。私は「そうだよ、順番を知らなかったら誰がやっても上手いかなんだから、ナツヒコが上手いかなくても当たり前だ。残念。」と続けました。するとナツヒコは、棒人間が描いてある面を裏にして、バツと指で書いています。「どうしたいの？」と聞くと、「版画のこと聞いてないからバツ、消したい」と答えました。「うん、版画を描いた昨日のナツヒコはビリビリ破いてバイバイしちゃおうか」と言ってナツヒコを見ると、「うん。」と、ホッとした顔をしていました。そして、二人で「ビリビリバン、ビリビリバン」と歌いな

がら破りました。「先生、おれのことビリビリ王子って呼んでいいからね！」と言いながら、ナツヒコは本物の王子様のようにさわやかに去っていきました。

3 学期に入りました。言葉で自分の気持ちを言うことを目標に取り組んだせいか、暴力や器物破損や飛び出しは無くなっていきました。けれども、自分では仲良くしようとしていても、それが相手にわかってもらえず、すれ違いによるトラブルはまだありました。ナツヒコの良さをクラスの皆に知ってもらいたいとは私は思っていました。担任のサクラ先生にお願いをして、ミニ先生の取り組みに入ることになりました。「これ欲しい」とナツヒコは紙飛行機を離しませんでした。そこで私は「これはあげられない。ナツヒコ、自分でつくってみればいいじゃん」と言いました。ハサミを上手く使えないナツヒコにとっては難しい課題です。その作業や練習を投げ出さなくてやるかどうかといういくつかの課題もありました。でも「やりたい！」と思っているナツヒコをサポートするチャンスがやっと来たのです。しかし、失敗してまた「どうせおれなんか・・・」モードに入ってしまったら元も子もないので、用心深く、ゆっくりやることにしました。まずやることを箇条書きにし、表を見せたり、実際にやりながらゆっくりナツヒコに説明しました。「うーん」と考え込んでいたナツヒコがきくと顔を上げて、「おれ、やる。幸せのブルーバード、飛ばしてみたい。皆に見せてあげたい。」と言いました。私も、やってみよう、とナツヒコの目を見て思いました。そして、とうとう本番の日がやってきました。「クリップはなかなか止められない人もいるからね、そういう人にはおれが止めてあげるんだ」。器用でないナツヒコだからこそ言える言葉を残して教室に向かいました。ナツヒコの紙飛行機が飛ぶと教室に拍手が起こり、「ナツヒコすごいなあ」という声があちこちから聞こえました。私の力を一つも借りず、

ナツヒコ一人で先生役を演じきっていました。できない友達がいると「そうなんだよ、ここはとっても難しいんだよ」と言いながらやってあげていました。そして出来上がったクリップ飛行機を皆で飛ばしました。ナツヒコの「幸せのブルーバード」はゆっくりゆっくり飛んでいきました。でも片付けが終わるとナツヒコはどこにもいません。やっと探し出すと、彼は肩を落としてうずくまっていました。「どうしたの？」と聞くと、「ゆうべ夢を見たんだ。いくら話しても誰も聞いてくれないし、クリップ飛行機はめちゃくちゃにされて窓から捨てられたんだ。だから教室の戸を開けるときすごく怖かった。でも本当の世界は違った。喜んでくれたから。」とナツヒコは話してくれました。ナツヒコはクラスで紙飛行機クラブという学級内クラブを立ち上げて、本当の「幸せのブルーバード」を探し始めました。最後に、ナツヒコの感想文を読みます。「夢の中とはちがった。みんながはくしゅをしてくれて、話を聞いてくれた。ぼくはしあわせで、風の国に行った気分です空をとんだ。そんなふうに目にうかんだ。ぼくはとってもうれしかった。みんなのひこうき、ブルーバードがとんだ時、まるでタカやワシ、いろいろな本物の鳥に見えた。ぼくはとってもうれしかった。」次に、「中 3 勉強会」についてお話ししたいと思います。NPO が相模原市の委託を受けてやっている事業です。それでは、ビデオをご覧ください。(約 5 分映像を流す) はい、ありがとうございます。このビデオは中学生の立場からという編集でしたけれども、私は学生ボランティアさんの立場からこの「中 3 勉強会」を考えてみました。この勉強会は学習というツールは使っていますけれども、中学生と学生ボランティアさんとの学び合いだと感じています。

数学でルートなんかいくら説明してもわからないし、分数の割り算では何でひっくり返して計算するのかという質問に、実は僕は答

えられなかったんだ、という学生さんもいました。そういう中で学生さんは、本当にわかるってというのはどういうことなんだろうという問い直しをしていきます。「わかった！」と言ってもらったときには理屈抜きに嬉しくて、こんな僕でも何かの役に立つんだとすごく感じたと言う学生さんもいました。それから、中学生と向き合う中で、本当にこの子たちが悪いんだろうかと、むしろ中学生の背景に問題があるのであって、この頑張っている中学生を見ると、社会って何だろうという問い直しになっていくとも話してくれました。心のずっと奥に封印していた自分のこと、たとえばじめとか父母との問題とか友達とのトラブルとか、いい子でいなければならなかった自分、そういうものともう一度出会い直す、そして、自分を認めて、抱きしめて、新しい自分づくりを始めたという人もいます。荒れた中学校に臨時職員となって今年から勤めている方は、『中3勉強会』の中学生と出会わなかったら、とっくにやめていたと思う。でもここで一緒に勉強するうちに、荒れるのにはきっとわけがあると思うようになりました。まだ彼らと気持ちがつながっているわけではないけれど、ここで子どもたちがどんどん変わっていったのを見ているから、きっと変わっていく、人は人と人との間で変わっていくということを信じて、もうちょっと頑張ります」と言ってくれました。学び合いが確かにそこにあるんだなど感じました。以上で私の話を終わります。ありがとうございました。

#### ◇コメント：尾木直樹

**尾木** 篠崎先生は子どもに寄り添って、子どもの心の動きを自分に共鳴させながら掴もうとしている。孔子の言葉でいうと「叙」ですね。いま論語に凝ってるのよ(笑)。その「叙」の心、それが思いやりに表現されていく。思いやりを持とうとか、この子のことを理解しようというふうに向かっているのではないアプ

ローチが、非常に素晴らしいと思いました。また、それができなかったときや上手くいかなかったときに自分を責めておられる、この教師の誠実さにも非常に感動しました。それからやっぱり、アスペルガーとか発達障がいの子どもをクラスの子にどう理解してもらおうかということ。子どもたちが仲間として一緒に生きていくために非常に重要なところですが、これもしっかり見ておられる。それから「中3勉強会」での大学生の支援について。僕はこの間、大学の試験で「 $2 \times 2$  はなぜ4なのかを  $2 \times 0$  は0であるということ意識しながら小学2年生に教えなさい」という問題を出したのよ。誰もできてないわ(笑)。計算しろと言ったらすぐできるんですよ、条件反射で0コンマ何秒でできる。つまり、いまの学生って本当に気の毒だと思うのですが、ステップアップをずっとしながらできる力だけはつけられている。基礎学力は徹底したトレーニングだ、なんていう学者もいますよね。とんでもない、そうじゃないですよ。基礎学力っていうのは認識の仕方を学ぶ領域であって、すごく大事な認識論の世界だと僕は思っています。そういう点でいうと、子どもに教えられないという場面にぶつかって、学生は「自分はできるのにわかつちやいないんだ」という大きな発見をする。学びとは何かということが見え始める、そういうきっかけを見つかるというのは素晴らしいと思いました。もう一つ、「新しい自分づくり」というキーワードにも感動しました。本当にそうですね。

#### ◆パネラー報告：石川ゆかりさん

**平塚** それでは、お二人目のパネラーに移りたいと思います。次は保護者の立場からご発言をいただきます。八王子市民で、同時に保護者でもいらっしゃる石川ゆかりさんです。石川さんは八王子市内で子どもたちと関わる様々な活動や、まちづくりの活動に関わって

おられます。昨年の3. 11の震災後は、石川さんたちの活動に法政大学が協力させていただいたり、大学の活動に石川さんたちの協力をいただいたりして、さまざまなご縁が続いています。今日は保護者としてのお立場でお話しいただこうと思います。それでは、よろしくをお願いします。

**石川** 八王子市の一保護者、一市民として活動しております、石川と申します。以前この多摩キャンパスで八王子と福島の子どもの交流合宿をやらせてもらって、そのときにお会いした学生さんの顔もいま見えます。その節はお世話になりました。

まず、子育てに関して自分ですごく気を付けてきたことがあります。私は、全体の仕事をしていたこともあって、人間は治る力を持っていると思っています。それで「子どもが自分で育つ力を見守る」というのが私の基本スタンスなんです。子どもは、熱が出たときや風邪を引いたときには、自分の力で結構治せるんです。だから病院で診察を受けさせて、いま子どもがどんな状態なのかを確認はするんですけども、薬は使わずに、子どもが治るのをずっと見守ってきました。いま子どもは中学1年生と小学4年生になっています。二人とも、予防接種をしていませんがインフルエンザにかかったことはありません。それから「手洗い・うがいをしろ」と保護者は必ず言うと思いますが、私は一度も子どもたちに手洗い・うがいをしろと言ったことはありません。でも、子どもたちは菌と仲良く暮らしながら、とても丈夫に育っています。

それで、普段は子どもが自然の中で遊ぶ「冒険遊び場(プレーパーク)」という活動をやっています。八王子はすごく自然が豊かなので、ルールを決めないでやっていて、子どもは怪我をしたりしますが、「ケガと弁当は自分持ち」というのがプレーパークのモットーで、小さな怪我をすることで大きな危険を回避す

る力を子どもに身に付けてほしいということで活動しています。

(写真を映しながら)これは2010年の夏休みの活動の様子です。プレーパークでは流しそうめんをよく好んでやるんですが、このそうめんを流す竹を切るところから子どもたちと一緒にやります。この写真は、切り出してきた竹のふしをお母さんたちが抜いてくれているところです。この写真は、ハンモックを吊るして、その中に小学生がガバッと入って、それを外からぐるぐる回して、ホースで水をジャーっとかけるという遊びです。結構ハードなんですけれども、すごく発散と言いますか、思い切りやる、暑い夏にはぴったりな遊びです。これはべっこう飴ができて喜んでいっている子どもの写真ですね。おたまに水と砂糖を入れて、火にかけてぐつぐつ煮立てると飴の液になります。それを水道の水で冷やしてカチカチにして、また火で炙って、周りだけをちょっと溶かして箸でずぶっと取ると、こんなふうになります。これもすごく子どもに人気のある遊びです。あとは建築の端材や木の切れ端をいっぱいもらってきておいて、焚き火に使ったり、子どもたちが打楽器を作ったりしています。これなんか、すごく発想豊かだと思います。あとは、斜面にブルーシートを敷いて上から水をちょろちょろと流すと、つるつる滑るウォータースライダーになります。着地する部分が泥なのでドロドロになります。こういう急な斜面でもやりますが、ゆるやかな斜面でも思いっきり助走をつけて頭からスライディングするといったような遊びを、大人も一緒にやっています。これは、木と木の間にロープをかけたブランコです。ただのブランコなんですけど、台座が狭かったりするので、バランスをとるのが難しいです。その割にハイジのブランコみたいに振れ幅が大きいので、すごくスリルのある遊びです。この写真では、大人が焚き火のそばで、裸足で火の番をしています。火

を使う遊びなら普通は長そで長ズボンで靴を履けと言われると思うのですが、私たちのところでは大人が裸足でこういうところにいてしまいます。すると、子どもは意外とこういうところには裸足で来ません。あれはダメ、これはダメと言っているとそれを破ろうとして来るんだけど、大人が楽しんじゃっていると、子どもはかえって、おれは危ねえからやらないよとなります。そういう危なさを自分から察知してちょっと引くという感覚を子どもはちゃんと持っているんですね。こういうことで、プレーパークの活動が私は大好きです。

それで、普段はこういうことを地域でしてきたんですが、3. 11以降には遊び場の活動を一緒にやっている仲間と、子どもたちが自然の中で遊ぶのは安全なのかどうかということをしごく話し合いました。八王子は大丈夫なのか、自分の子どもは守れるのかと話し合う中で私たちがしごく考えたのは、じゃあ福島の子どもたちは外で遊べなくていいのかということでした。それで、仲間はそれぞれの居場所でそれぞれに福島の子どもを呼ぶ活動を始めたのですが、私は八王子市の旭ヶ丘団地というところに住んでいるので、旭ヶ丘子ども会のお母さんたちと一緒に、こちらの多摩キャンパスのご協力も得ながら、福島県の岡山ソフトボールスポーツ少年団というチームを呼んでソフトボールで対戦するという企画をやりました。福島ってソフトボールがすごく強いんですね。そのことは、私も福島県出身なんですが、呼ぶまで知らなかったんです。それで八王子の3チームと対戦したんですが、全試合で岡山ソフトボールチームが勝ちました(笑)。

この企画をやるにあたって、法政大学では宿泊施設を貸して下さったり、ボランティアの学生さんがたくさん関わってくれました。自治会館で歓迎会をやったり、ラグビー場で遊んだり、学食で一緒にごはんを食べたり、

小学校の校庭で学生さんがギターを弾いてくれたりして、子どもたちは大喜びでした。ラグビー場ではちょうどラグビー部の学生さんたちが合宿をやっていて、一緒に遊んでくれました。子どもたちはしごく喜んでいましたし、今でも楽しかったと話します。そういう「うきっ!」とか「わくっ!」という気持ちは、子どもが育つときにとても大事だなと思っています。たとえば、このときだったら福島の子どもたちには「東京行ける、スカイツリー見れる、やった!」という気持ちが絶対あったと思うし、大学の寮に泊まることも珍しかったんですね。もちろん旭ヶ丘の子どもたちも大喜びだったし、福島から来た子どもたちもしごく発散して帰りました。震災から1年経った頃の企画だったのですが、彼らは1年間、外遊びはなかなかできず、チームの練習も校庭で自由にできなかったり、スライディングが禁止だったり、そういう制限された中で外遊びやスポーツをしてきていたので、しごく元気になって帰っていきました。

こういったことのほかに、自分の子どもの通う学校では「放課後子ども教室」の推進委員会ということで“放課後おばさん”もやっています。私は、自分や仲間が地域でやっているように、学校でも校庭で子どもたちが自由に遊べれば「放課後子ども教室」は回るだろうと思っていたんですが、そういう考えは全然甘かった。あまりうるさくしないようにしたら、子どもたちは好き放題やるようになってしまいました。「放課後子ども教室」はどうも自由でいいらしいぜということで、子どもたちはどんどん参加するようになって、見守る大人7人に対して、子どもが150人くらいバァーっと来るんです。「うるせえクソババア」と言って、ボール欲しさに後ろから飛び掛かってくるとか、学級崩壊したクラスみたいに。子どもたちは盛り上がりすぎてしまいました。それでやっぱりけじめをつけなきゃいけないなと思って、「放課後子ども教室」をこの

夏休み前に中止にしました。子どもたちには、学校でどんなに先生に悪態をついても学校は終わりにならないし、家でお母さんにどんなに嫌なことを言っても、お母さんはそばにいてくれるけれども、「放課後子ども教室」はそんなにめっちゃくちゃなことをしたら、なくなってしまうんだよということを伝えたかったんです。地域で子どもたちに対して本気で怒ってくれる人というのは、いまは少なくなってきたと思います。私の周りには地域のネットワークがあるので、うちの子どものことを近所のお母さんたちも怒ってくれるし、そういう近い間柄でのやりとりはあるんですが、それでも子どもたちはちょっと甘やかされていると、言葉遣いにしても態度にしてもメリハリがない、ちょっと自由すぎるなあと思っていました。なので、夏休みが終わっても「放課後子ども教室」は再開させませんでした。子どもたちは学校で会うと、「いつになったら始まるのかなあ、またやってくれるんだろうなあ」という目で、私のことを遠くからチラチラ見ていましたが。その後 10 月に入ってから保護者に意見を聞く会を開いて保護者ともコミュニケーションをとり、先生方とも協力して、11 月からは再開しました。今月 2 回開催してみて、子どもたちはすごく礼儀正しいです。別にいつもいい子でいてほしいと思っているわけではないのですが。再開した当日は、ある 2 年生のクラスの子どもたちが、ほぼ全員で私たちに向かって「今日からよろしくお願いします」と、すごく真剣に頭を下げてくれました。そこへ担任の先生がやって来て、「君たちの態度次第で、『放課後子ども教室』はこれから続くか、なくなってしまうかが決まるんだからね」と言ってくれました。先生方も協力してくれて、そんなふうにして地域で連携して子どもたちと関わっていくということは、すごく楽しいなと思っています。

それから、私は子どもとの関わりとは別にトランジションタウンという活動もしていま

す。こちらは大人同士が地域でつながって、助け合ったり、無理だと思われるようなこともどんどん実現していこうよというものです。資料をお配りしてありますので、こちらもお時間があるときにゆっくり読んでみてください。以上です。

#### ◇コメント：尾木直樹

**尾木** いまのお母さんの活動を聞いていて、素人ならではの、たくましさとか手荒さとか無謀さとか、そのパワーと愛情をすごく感じましたね。「放課後子ども教室」を閉じてしまうとかね、なかなか学校の教師はできないですよ。それをおやりになって、しっかり何ヶ月間か子どもの頭を冷やして、再開するときには先生方も応援して、保護者会議を開いてまた問題を深めていく。すごくダイナミックですね。地域にはこういうお母さんもいれば、もっとすごく繊細なお母さんもいて、色々なお母さんがいますから、そういう市民の力が、子どもたちに向かって何かの形を作ったときには、やっぱりすごく大きなパワーになるなと感じました。僕もプレーパークに遊びに行ったことがあるんですが、2 時間いたら心臓が縮み上がりましたね、あの危険地帯（笑）。よくあそこにおられるわ。それだけで僕は感心しましたね、本当に尊敬します。

#### ◆パネラー報告：石野由香里

**平塚** 次に、大学からの発信として、石野由香里さんにお話いただきます。石野さんは現在この法政大学にある多摩ボランティアセンターでコーディネータをされています。2009 年の開設時から 3 年半、学生たちと地域社会をつなぐ仕事をされています。法政大学にお勤めになられる前には、NPO 法人で地域振興のプランナーをなさったり、ご専門としては文化人類学の研究をなさったりもしていました。それからご本人は書いていらっし

ゃらないのですが、実は受賞経験もある映画女優でもいらっしやいます。それでは、よろしくをお願いします。

**石野** 初めまして、石野です。いま篠崎さんからは、子ども一人ひとりに丁寧に向き合い、その子の固有性に寄り添った関わりの事例をいただきました。石川さんからは、地域というフィールドへ視点を広げて、学校という組織の中の保護者であり、“地域のおばちゃん”としての関わりをお話いただきました。私は大学の中で、大学生の育ちというものを横目で見ながら、同時に大学や学生が地域へ貢献するための仕組みをつくるという仕事をしています。本日は、学生たちが地域の中で子どもや高齢者、それから地域の中のアクターたちの支援をしながら同時に自分も育つという現場のリアリティについてお話ししたいと思います。

まず前提として、私の職場であるボランティアセンターには日々山のように学生のボランティアが欲しいという依頼が来ます。ただその依頼主というのが、多かれ少なかれ学生というものに対して幻想を抱いているというのが私の感想です。私の役割はそのズレ、つまり学生が持っているリアリティと地域が抱えているリアリティの両方の間を取り持つようなことだと思っています。お手元の資料にマインドマップのようなものがありますので、あとでご覧いただければと思うんですけども、学生が地域でボランティアをするときの私のイメージを図式化すると、地域は受け皿になっていて、そこは「場」としてはある意味、安定的にあります。そこに学生が飛び込んでいって、学生が素材だとしたら“料理”され、育てられて巣立っていき、そしてまた新しい素材が来るということを繰り返していき、その都度変化しながら育っていくというイメージです。その中で感じていることとか、ポイントがあって、一つは受け入れ先

である地域も、学生が来ることによって気付きを与えられ、変わっていくということ。もう一つは、地域に責任を持つのはあくまで地域の住民であるということ。そこはぶれてはいけなくて、何かプロジェクトをするとき、学生がいなくなってしまうたら成立しなくなるような形態は脆弱なので、そこは学生も地域も両者が意識してつくっていく必要があると感じます。地域の方々からよく聞く不満で、学生は4年間で入れ替わるから、せっかく育てたのに続かないという声がとても多い中、最近の会話の中で「学生はメンバーが入れ替わっていくのがいいんだ」と、その新陳代謝のよさをポジティブに捉えてくれている地域の方がいました。この考え方がまちづくりにしても何にしても、一つの考えるべきポイントなのかなと思います。

それで、話は重なってきますが、地域の方から「学生ボランティアが続かないんだよね」とか「最近の学生は根性がなくてね」という不満は多いのですが、それはもっともだということがありつつも、私は逆に「その学生を引きつけておく努力をしていらっしやいますか？」というふうに問いかけるのです。それが上手くいっている事例も後ほどご紹介しますが、学生が続かないという時には、私の目から見ると依頼先にも理由があることが多いんです。コーディネーターの人がいなくて、来た学生をそのまま放置している。そもそも学生は、ただ受け入れているだけで自動的に辛抱強くその現場の課題を解決してくれる存在ではないということ、学生を信頼してある役割を渡すことは大切ですが、同時にあてにしすぎたり頼りすぎたりするのは危険だということ、同時に理解していく過程が必要だと思っています。

例えば、学生に対する幻想の中身でいうと、これはよく教育現場に学生を送り出す時に起こることですが、一つは、人手が足りないからとにかく来てくれという“当てはめ”の考

えに対して学生が疑問を持ってしまうというよくあるパターンです。もう一つ、意外に逆のパターンとしてあるのが、受け入れ先の教員には「学生も育ててやらなければいけない」という意識が働くので、学生に対して「あなたがボランティアをすることはあなたのためになるんです。あなたの勉強になるんです」と言いすぎると、学生はそこに違和感を覚えていくんですね。勉強になるのはその通りなのですが、それは結果的に学生にとってそうなることであって、依頼元が押し付けることではないのではないかなというの、間を仲立つ私に見える景色です。

それから次に、学生がある地域に関わることで起こった、つまり学生という特異な立ち位置を持つ存在がいなければきっと起こらなかったであろうという小さなムーブメントのような事例をお話します。これは、学生の活動先であり、主に高齢者の相談に乗るお仕事をされている私のようなコーディネータがいらっしゃる地域でのことです。そのコーディネータは主に高齢者の相談に乗っていて、この図でいうAさんというアルコール依存症らしき70代の女性から色々な相談を受ける中で、孫にあたるBくんと上手くいっていないという相談を持ち掛けられていたそうです。その家族というのが、恐らく旦那さんと離婚されていて、お母さんが一人でBくんを育てていらっしゃるのです、本当に夜中まで働きづめで、家事はどうなっているのかなというように状態の中で、Aさんと3世代で暮らしていました。

そういう相談があった一方で、ある日そのコーディネータの方とある学生が、たまたまスーパーの前でDさんという近所のお母さんに会った時に、そのお母さんの息子さんのCくんとBくんが友達だということ、しかもそのBくんが実は学校ではとても不安定で、感情をぶつけてしまったりして、ある意味問題児のように見られてしまっていることが、

全く別のルートで発覚したんです。それだけを聞くとそこで終わってしまう話ですよ、その方も高齢者の支援をする職種なわけで。ただそこで、たまたまた学生が「でもBくんって中3ですよ、そんな状態で勉強とか大丈夫なんですかね」ということを言い始めて、その商店街のある一角のスペースを借りて勉強を教えてあげたいと言うので、そのコーディネータが仲立ちをして、本当に初めはその学生が一人の子に好意で勉強を教えてあげるということから、勉強会が始まりました。そうする中で現在、その子づてやその場づてに、学校で上手くいっていない子どもたちが集まり始めるということが起きてきています。その集まり始めている子どもたちの中身を見ていくと、やはり学校という空間の中で上手くいかない子なので、学校の中で放課後に勉強会などをやってもなかなか行くことができないということも見えてきました。そこでこのように関わる人を代えることで、一つ道が開けてくるのかなと感じています。それから、学生はお兄ちゃん・お姉ちゃんという存在であると共に、友達にもなれます。とかく大人だどうしても導こうとしてしまうようなところでも、また違う目線で見ることができる。まだ上手く展開するかどうかは経過を見なければいけません、そういったところは一ついい特徴かなと思います。一方で、コーディネータが「Aさんのことが心配だ」という専門職としての視点からこの会を見ると、Bくんをケアすること、Bくんがそこに入出入りすることでAさんやその家族全体の様子を見守れるので、そういう点がいいと言うんですね。そのコーディネータ自身も、高齢者の問題はそれだけに囚われていては解決できないということに気付いたと話されていました。このように、一つのテーマに固執しないことによって、地域全体から何かアプローチできることがあるというのは、次の事例からもわかることです。

次の事例は、八王子市の館ヶ丘団地という、大学からすぐ近くにある団地で起きたことです。この団地は今年の6月から東京都がおこなっている「シルバー交番設置事業」のモデルとして、団地のあるスペースで高齢者のための相談室を開設しています。学生は当初からそこにボランティアで入り始めていて、昨年から今年まで引き継いで、高齢者の熱中症予防対策のための給水活動や戸別訪問をするという活動をしていたんですけれども、今年はその事業に対してのお金が十分には無いということでした。せめて来てくれる学生さんにご飯くらい出してあげたいということをやコーディネータの方が考えられて、苦肉の策で呼びかけてみたところ、40人の住民から150キロのお米が集まりました。そうやって寄付されて、寄付しただけでは終われないので、今度は「私たちが握ってあげなきゃだめじゃないか」ということになって、5〜7人くらいのボランティアの皆さんが、これを契機に集まっておにぎりを握ってくれたり、差し入れをしてくださるということが展開していきました。そこから、夏が終わってもラジオ体操教室が毎朝続いたり、そういう大学生に憧れた小学生が活動に参加して行って、どんどん人数が増えているということも起きてきています。私が聞いたエピソードの中で印象的だったのが、知的障がいを持つ子どもがたまたま一緒に参加していたらしいんですけれども、学校の中では障がいを持っているということではなかなか同級生との関わりが難しいその子も、地域の活動の中では伸び伸びとしていたということなんです。また、できることをやってもらって他のできないことをフォローしようという大学生の姿勢を見て、その振る舞いをほかの子どもたちが学習して真似ていくことで、子ども同士の関係が上手くいくというような経過も見られたそうです。小学校の先生からも、そういった活動を経て夏休みが終わってみると、その障がいを持って

いる子どもが明らかに明るくなったということを知っています。その他にも、大学生と中学生がペアで戸別訪問して独居の高齢者で心配な方を訪ねていくというものがありますが、そのときには、ただ大学生は中学生に教えるという立場ではなくて、むしろそこに住んでいる中学生は団地のことには詳しいので、その子には空き部屋のチェックを教えてもらおうということで、協力関係でやっています。あとはもう一つ、団地内に住む聴覚障がい者の方に出会ったある学生が、その方が地域の中で少し引きこもりがちになっているということを感じて、何とかその方を地域に引っ張り出したいということをおもったんですね。そこで考えた学生のセンスがまた素晴らしいと思うんですけれども、ボランティアをその方にして差し上げるということではなくて、むしろその方に先生になってもらおうと考えつき、その方を先生とした地域の住民向けに手話教室を開催したところ、そこに生徒として集ってきた住民の方々と新しいネットワークと、見守り合うという関係性が生まれていきました。

今、ざっとご紹介した事例からもおわかりいただけたかと思いますが、学生というのはある意味まだ大人になりきれていない年齢で、中途半端だと言われていて、必ずしも自分たちに何ができるのかということを見つけていませんが、その浮いた存在だからこそ「繋ぎ目」だったり、内と外の出入りの自由が許されるような立場だからこそできることがありますし、尾木先生も言っておられましたけれども、そもそも学生はとてもフレッシュなアイデアを持っているので、それ自体が喜ばれるということもあります。

最後になりますけれども、私は学生の活動を見ていて、ある分野とか、ある個人に一对一で向き合うのとは違うような、ボランティアというよりも、地域での関わりができていると思いました。たとえば、学生がある障が

い者にボランティアをしてあげましょうという張り紙を見て行く場合、ボランティアをしてあげる／してもらおうという、そこでも関係性が閉じてしまうわけなんですけれども、そうではなくてさっき言った事例のように、学生は地域の中に当たり前にいる存在として、一緒に活動を行っています。それから、私は「子どもと一緒に遊びましょう」というボランティアに対して、そういった形式以外にありえないのかな、といつも思っていたんですけども、子どもと遊ぶということを目的化してしまうのではなくて、地域の中で同じ何かをやり遂げる同志として活動を行うというところに、何か質的な転換があるようにも思いました。その中で地域もやはり一緒に変わっていき、育っていく、高齢者も学生も子どもも一緒に育っているなと思います。

今日は時間の関係でご紹介できないのですが、学生が色々な活動をする中で、皆が話し合いながら、私が教えるということではなく学生自身が気付いて導き出したことがあります。それは、地域のごときは結局住民がやるし

かないと、私たちは手伝うこともできるし関わることもできるけれども、私たちはむしろ気付きを与えうる存在になれるのではないかということでした。そしてまた、そういうこと自体に気付けた学生が、大学時代が終わったらその地域での活動は終わってしまうかもしれないけれども、自分の地域に帰ったときに一市民としてその気付きを生かしていくことにつながるのであれば、大学という機関の中で、こういった課外活動として行う意義があるのではないかなと思います。

#### ◇コメント：尾木直樹

**尾木** すごく素晴らしかったと思います。個々のつながりというより、学生が飛び込んでいく中で地域が動いていく。個々の発想が豊かになり、無限の可能性が広がっていく。人のつながりから生まれる活動、息づかいのあるネットワーク。これがすごく印象的でした。いままでのものとは少し違うなというか、もうちょっと理論的に深めたいなという思いを持ちました。

## 全体討論

**平塚（司会）** ここまで、お三方のパネラーからお話をいただきました。皆さん本当に短い時間の中で上手にお話くださってありがとうございました。このあとは、会場の皆さんともお話ができればと思っております。はじめに、ここまで学生さんがまだ発言をされていませんが、大学内での企画ですので、ぜひ学生さんにも話していただきたいと思い、最初に口火を切る形でお一方にだけ事前に発言をお願いしてあります。ですので、ぜひ二人目、三人目と学生さんの発言が続いていったらいいなと思います。

お願いしている方は、社会学部4年の池田友里恵さんです。池田さんはこのキャンパス

で教職課程を履修している学生さんですが、同時に大学に入って以来、パネラーの石川さんや石野さんたちとも関わりを持ちながら、障がいをもつ方たちや不登校の子どもたちなど、色々な方たちと一緒に学外で活動をされています。なぜそういう活動をするようになったのか、そういう活動の中から何が見えてきたのか、そういう池田さんにとってこれからの教師や学校はどんな場・存在であってほしいのかということ、少し自由に話していただけたらとお願いしてあります。ぜひよろしくをお願いします。

#### ◆池田友里恵（社会学部4年）

**池田** 社会学部4年の池田です、よろしくお願ひします。私は大学で教職課程を取っていて、かつ地域の中で色々な活動をさせてもらっている学生の一人として、主に不登校の子どもたちとか、障がいを持っている方たちと関わりを持たせてもらっています。それで、たとえば今日は何をしていたかという、朝から近くの畑に行ってたまねぎの苗を植えて、地域のお母さんにご飯を食べ、地域のおじさんにレタスをもらって、学校から帰ってきた子どもたちと「トイ・ストーリー3」をみて、それでいまここにいます。授業はどうしたんだっていう（笑）、まあそういう感じで毎日過ごしています。

こういう地域での活動をやっている人というのはあまりメジャーではないかもしれないし、私がこうして地域に入っていけているのも、勢いというか流れというか、そういう感じではあるんですが、その流れに乗ってみようと思ったきっかけというのが一応あって、それが高校時代の出会いの少なさでした。それは恋愛とかではなくて、色々な人との出会いがあまりに少ないということにモヤモヤしていて、何で毎日学校に行って、何となく勉強しているんだろうとか、どうしてここには障がいを持った人が一人もいないんだろうとかかいうことを色々考えながら、でもそういったことを考えて立ち止まっていると置いていかれている感じもしたし、一緒に考えてくれたりそれに応えてくれるような大人も私の周りにはいなくて、自分自身もそういうものに付き合えるほど成熟しているわけでもなくて、そういったモヤモヤを持ちながら、人が育つとか学んでどうということのかなどいうことを考えながら大学に入ってきました。

そういった地域での関わりの中で、やっぱり色々な人に出会っていきますよね。その出会いというのが、私の中では3段階あって、それは段階的に起こるのではなくて同時に起

こったりもするのですが、一つは当事者との出会いです。これは、不登校の子どもや障がいを持った人との、その世界との出会いです。もう一つ、当事者ではないけれども、その周りにいて支援というか、当事者と付き合っている人との出会いがあります。そして三つ目は、そういった人たちと出会った自分自身との出会いです。先ほど「出会い直し」という言葉がありましたけれども、まさにそれです。そういった出会いが生まれたときの感動というのは、音楽とか映画とかで感じるものとは少し違って、何かでもすごいぞという、言葉にできないようなものがあります。そういうものがあって続けているのかなと思います。

そういう出会いを通じて自分は何に気付いたのかということ、はっきり言えるのは、色々な人に出会って、自分の経験ではわからないようなその人の人生を知れたことで、「その人になる」ことができたと感じています。自分には決してわからないんだけど、その人になることによって、その人の傷付きとか不安というものに少し近づくというか。自分の体験からあなたのことわかるよと言ってもそれはきっと嘘で、本当は、自分が経験していないんだからわからないんだけど、一緒に生きている、そこから付き合いは始まるのではないかなと思います。それで、そういう感覚を持っている人は、やっぱり地域の方と信頼し合っていける人でもあると思うんですね。大人たちが信頼し合っている中で子どもは育つべきだし、そういう大人たちを見て子どもは育っていくのかなと思います。

最後に、多くの皆さんが学校に入学して卒業してを繰り返してきていて、わかるだろうと思うんですが、一つ学校を卒業したからといって自分がそのとき抱えていた不安とか傷とかは、学校を卒業して違うところへ行ったからといって消えるものではなくて、ずっと持ち続けなくちゃいけない。それは子どもも大人も一緒ですが、それを解決するというこ

とではなくて、それを持ち続けながら皆で生きていけるような人間をつくっていけるのが、やはり地域という場なのかなと、この活動を通して感じています。以上です、ありがとうございました。

**尾木** 出会いを三つの領域から捉えていて、そういう人と出会った自分との出会いということで、自分がきっちり相対化されている、その姿に非常に感動しました。それから人間発見の意味なんかも非常に鋭く掘んでいたり、自分ではない「人になってみる」という、これはまた孔子の言葉で言うと「恕」かな(笑)。つまり共感なんですよ。共感というのを同感とか同情とかと間違えている親や学校の先生は多いですが、先ほどから報告してくださっている方々には皆共通していますよね。この心を持つ、そういう人間観というのかしらね、そういう生き方というのは極めて重要だと思いました。

**平塚** それでは、残っている時間はあまりないのですが、最初の尾木先生の講演、パネラーの方々のご発言、池田さんの発言を聞いていただきながら、もちろんご質問もあろうかと思えますし、自分もちょっと話をしたくなったという方や、感想だけでも言わせてくださいということもあろうかと思えます。また、いまここには色々な方がいらっしやっているように思えます。どういったことでも結構ですので、お話しいただけたらと思います。

**発言者 1** 他大学から篠崎先生のご紹介で参加させていただきました。私は「中 3 勉強会」に参加しています。「中 3 勉強会」には色々な子どもがいて、その中には、学校では担任を辞めさせたということを言っているくらいの子どもの方もいます。それでも勉強会には来てくれていたんですけど、その中で一番印象に残っているのが、卒業式のとき、見たこ

とのないような笑顔を見せてくれたことでした。本当に目頭が熱くなったというか。そういう経験をさせてくれた地域の大切さを今日はまた確認できて、今回のシンポジウムはともいい場だったなと思います。ありがとうございました。

**発言者 2** 法政大学の付属高校の 2 年生です。私たちは「イノヘッド」という自主活動をやっています。私たちの学校は 6 年前に共学になり校舎が移転して、井の頭公園の高級住宅街の真ん中であって、場所自体はともいいんですけど、通学路での生徒の声などでしばしば近隣より苦情をいただいていた。そこで、地域との問題をなくしていこうじゃないかということで、2010 年から「イノヘッド」という活動を進めています。「イノヘッド」は自主活動で、生徒主体でやっているんですけども、一方で、学校の先生や生徒会の中には、地域問題についてお手上げだという人たちもいる。今回のテーマは「地域とともに育つ教員養成をめざして」ということなんですけど、どうしたら先生は地域の問題に目を向けてくれるのかなということを疑問に思っています。「イノヘッド」の活動をより学校に近づけていくか、学生たちの自主活動で続けていくか悩んでいるところもあるので、そのあたりを尾木先生にもアドバイスいただければと思います。

**尾木** 実際には君たちの学校だけじゃないですね、多くの私学がやっぱりそうだろうと思います。やっぱり先生を変えていくのはね、なかなか変わらないわ。だけどね、人間て変わるんですよ。先生だって 50 歳になっても自分を相対化して感動して、変わっていきのね。僕なんか 63 歳でママになったんだからね、大丈夫よ(笑)。それで言えばね、先生たちのところに君たちが行くっていうことも重要ですけども、地域の人と一緒に入って

もらって、地域と生徒と先生とが一体になって輪を大きくして行って、そこに全然近寄って来ないような先生は居づらくなると、そういう疎外感を持てるくらいの拠点をつくっていく、渦をまいていく、それが大事だと思います。

**発言者3** 私は八王子市内の会社員で、小学生の保護者です。息子の担任の先生は3年間で3回代わりました。息子にはちょっと引っ込み思案なところがありまして、1年生のときに担任の先生から通級の教室に通わないかと言われました。選択性緘黙といって、家では喋るんですが学校では一言も口を利かない子どもでした。そして、家では担任の先生があまり好きじゃないということを書いていました。しかし2年生になると担任の先生が代わって、学校でも友達と喋るようになり、授業中も手を挙げて発言をするようになりました。ああ、担任の先生の違いでこんなにも変わってしまうのか、こう言っては何ですけれども、運が悪いと子どもはいい教育を受けられないのかなと思いました。

実は心臓に少し病気があり、体育もできなくて外で友達と一緒に遊べないので、引っ込み思案なところがあり、そういうことになったのですが、何度も学校に行行って、うちの子は大丈夫ですと言っても聞いてもらえない、訴える場がない。ただの保護者としては、教育の場は学校だと思っているので、学校が聞いてくれなかったら、どこに意見を言ったらいいのかわからない、すごくもどかしい思いがあります。「はずれ」を引かないように祈るしかないというのは、親として非常にはがゆい思いをします。学校にはそういった地域の声を聞く教育現場になってほしいと思います。

**尾木** いまのお父さんのご発言、心にズキッと刺さってきました。「当たりはずれ」という

のは本当にひどいですよね。ただ学校経営の視点から言えば、「はずれ」の先生の中にも素晴らしさはあると思うんです。「当たり」の先生の持っていない素晴らしさがね。学校っていうのは皆の力を合わせて、チームで総合力を発揮していくんです。だから、「はずれ」の先生が上手く噛み合っていないときには、その知恵や力を発揮できるような先生たち全体の動き方が重要になってきます。

僕も現場にいるときには、自分のクラスが上手くいくのを喜んでいる時期があったんですよ。僕が受け持った子どもはちゃんとやってみせるって。だけど35歳くらいになって、それは間違いだったと気がきました。担任が代わった瞬間、元の木阿弥になっちゃうわけ。それって違うじゃないか、何も確立できてないじゃないかと思いました。それからはチームプレーというか、前の学校で学級崩壊を起こしてきた先生なんかでも、その先生を輝かせる、子どもたちに信頼できる先生なんだと思われるようにならなきゃいけないと考えてきました。そのためには、教員同士が信頼し合っているとか、力が発揮できるように仕事を割り振るとか、そういうことがすごく重要なんです。意外と学校現場ではそういう先生をバカにしたり、生徒もその先生の悪口を言ったりすることが多い。

若い学生さんには、そういうまなざしも持って学校現場に出て行ってほしいなと思います。それから、地域の声を聞く教員がいないというのは、これは教員が皆さんの税金で給料をもらっていることを忘れてるんですね。とんでもないと思います。地域の住民とともに歩む学校、校長、教師だということを、何とか確立しなきゃいけないと思います。

**篠崎** はずれの教師の代表みたいな感じでお話しさせていただこうと思うのですが(笑)。お子さんが2年生になったら喋れるようになったというのは、もちろんそれは担任の先生

が素晴らしい先生だったんでしょけれども、私は話を聞いていて、お父さんがその子のことを喋らせてあげることができたのかなと思ったんです。子どもを信じてくれている、うちの子は大丈夫だと思っている親のもとにいる子どもは、たとえいま言葉が上手く出なくても、心の中ではいっぱい喋っているはずなんです。それをわかってくれる誰かがいたら、きっと喋ると。喋らなくても素敵なお父さんだと思っただけです。だから、いまのお父さんのご発言には色々なことを教えていただきました。

それから、現場にいた者としては、「一本電話があったら学校は変わる」と私は思っています。保護者の声を聞くというのは、確かに、正しく聞いているかどうかはわからない。ただ絆創膏を貼るみたいに、その場凌ぎをやっているのかもしれませんが、それでも声を上げることと決まらなくてほしいと思っています。逆に、なかなか変わってくださらない保護者の方もいらっしゃるんですが、そういう方にも、いま尾木先生がおっしゃられたように、必ずいいところがあったり、その人なりのわけがあったりするんですよ。そのわけを教えてくださいと、私がちょっとドアを叩くと、入れてくれたりすることがある。

教師とか親とかそういうくくりではなくて、一人の子どもやクラスのことを考えて、皆が幸せになったらいいなという思いは、必ずつながるはずなんです。はずれと言われる教師でも、ちょっと認められると変わります。やっぱりお互いにいいところを見つけるといのが、地域を動かす小さな力かなと思いました。

**発言者 4** 他大学から偶然今日、西八王子駅でこのポスターを見て来ました。地域と上手くつながっている学校とそうでない学校があり、地域とつながれないシステムを持っていると閉鎖的になって、学校から「落ちこぼ

された人」にも地域の手が届かなくなってしまふのかなと思ったので、上手くつながっている学校とそうでない学校の二つを分けている違いはどこにあるのかをお聞きしたいです。

**発言者 5** 一般の保護者です。尾木ママのファンで、ブログを見て今日は駆けつけました。石川ゆかりさんが「ケガと弁当は自分持ち」ということを最初にお話されていましたが、私はああした大胆な遊びは、やらせてくてもどうしても心配が付きまわってしまいます。実際に「自分持ち」とは言っても、あとでクレームや多額の請求書が来るとか、子どもを見ている間の不安とか心配はないのかなと純粋に疑問を持ったので、教えていただけたら幸いです。

**発言者 6** 小金井キャンパスから来ました 3 年生です。今年の頭に小学校時代の恩師と居酒屋で話をする機会がありまして。そのうちの一人が今年 45 歳の男の先生で、すごく熱血でむちゃくちゃな先生だったんですけれども、去年は保護者と上手くいかなくて鬱になって、1 年間治療を受けていたんだという話を聞きました。かなり自由な先生だったので、そういう人まで悩んでしまうのかと思いました。今日お話にあったような地域の方々は、すごく学校に理解があって協力しているようなんですけれども、石川ゆかりさんが活動されていて、いわゆるモンスターペアレントと言われる方々の反対や圧力はあったのか、またどうしたら理解を得ていけるのかということをお聞きしたいです。

**発言者 7** 相模原市の中学校で教員をしています。学校のほうに今回の案内が来たのですが、まだまだ皆残って仕事をしている時間ですが、私は今日から産休ということでこちらに来ることができました。中学校の学校現場は、40 人の生徒に毎日 6 分の 6 のフルの授

業をやっている、放課後も部活動や委員会、生徒会などがあって、本当に教員は疲弊しています。地域に目を向けたいと皆思っているんですけども、なかなかそういうわけにもいかず、日々の雑務に追われています。一人ひとりの個性に合った指導をしたいと思いますが、なかなか思うようにできない現状もあるということも、ご理解いただきたいと思っています。

**発言者8** 一般の保護者です。娘が高1と中1なんですけれども、上の子が「きこえとことばの教室」に通っていたことがあったんですね。生い立ちを話すと、2、3時間かかってしまいますので(笑)、教育委員会と学校ですったもんだがあったというエピソードを簡単にお話ししたいと思います。

小学6年生になって中学の問題が出てきたときに、養護の先生から、やっぱりこの子は普通学級にいるといじめにあたり大変だろうから、特別支援学級に行ったほうがいいんじゃないかというお話をいただいたんですね。本人もすごく意思がはっきりしていて、なんで私だけがそういうところに行かなきゃいけないのといい、私はそうだよと娘の気持ちを尊重して、まず担任の先生とお話をしました。担任の先生はやはり養護の先生がそう言っているからの一点張りでしたが、人間同士話せばわかるんじゃないかと思い、何度も先生とお話ししました。先生も、お母さんがそこまで言うなら大変ですねと言われましたが、大変なのは私じゃなくて娘本人なので、どんなに苦勞させてもいいし、私も人間同士、傷付け合うって言ったら変ですけども、助け合いながら成長していくものだと思っていたので、娘の意思を尊重して、普通学級に入れました。

教育委員会ともかけ合いましたが、その先生はすごく物分かりがよくて、つらくなったら相談していいんだよということで、安心

して普通中学校に入れました。娘は、学校が嫌いではなく、楽しく学校に行って、友達はそんなに多くなかったようですけども、高校も自分に合ったところを見つけました。もしかすると、特別支援学級に入ったら高校も行けなかったんじゃないか、職業訓練をして、就職するという道がそういうところでは一般のみたいなんですけれども、どうにか高校にも行けて、いまはファーストフード店でアルバイトをしたり、カラーコンタクトを入れてみたいとか、普通のギャルっぽい高校生になって、楽しく生きております。

問題児扱いせずに、また人間同士話し合えば、教師だから親だからということではなくて、分かり合えることもあるのではと思ってとことん話し合っ、いまはそういう結果に至っています。

**発言者9** 八王子みなみ野から来ました一般の保護者です。私はみなみ野で小中学生を中心とした異年齢の遊びの会を主催しています。法政大学の学生さんも来ていただいております。とてもいい雰囲気で作らせてもらっています。

保護者はどうしても自分の子どもを中心に見て、同年齢の子と比較して、この子はとても優秀だとか、うちの子は劣等なんだとかいうことを毎日考えているんですが、3つ4つ離れた子どもの中だと、自分の息子はすごくおっとりしているけれども優しい面があるんだなというふうに見ることができたりとか、3年後にはこんなふうになっているかなと、将来の子ども様子を想像して安心できたりします。学生さんは親でもなく子どもでもなく、その間に立ってくれるので、お母さんにそれは厳しすぎるよと言ってくれたり、僕も中学時代はこうだったよと話してもらったりすると、親も安心して優しい気持ちで見守っていくことができるので、とても助かっています。

この団体は娘がきっかけで立ち上げたもの

なのですが、私の娘の一人は発達障がい、それに気付いたのが遅くて小学5年生でした。最初に集団に入れたときはとても楽しく、皆から愛されていたのですが、自分自身も知識がなかったのと、周りの学生さんも娘にどう付き合ったらいいのか、どういう駆け引きをしたらいいのかという距離感が取れず、居場所がなくなってしまいました。娘は離れてしまったのですが、もしかしたら息子さんが発達障がい、それで駆けつけてきたのかなというようなお子さんもいます。でも、この子はこういう面があるけど、それでもいいじゃんというふうに学生さんが言ってくると、周りの子どもたちはとても頭や心がやわらかいので、大好きなお兄さんお姉さんがかけてくれる一言で、子どもの心も変化しますし、見守っていてくれるという環境で息子が受け入れられていると、親の心も穏やかになって、またさらにいい効果が出るのではないかと期待しています。

学生さんは4年間のうちにどっぷりと浸か

って、その子の将来を深く考えてしまうと、発言が慎重になってしまうかもしれませんが、私はある意味、無責任な言葉でいいと思うんです。こう言うと語弊があるかもしれませんが、軽い気持ちで。障がいの名前で分類されるのではなくて、目の前の子どもがこういう症状が出ている、じゃあこの子に対して周りにいる子どもたちにどう関わりを持たせようかということに視点を置いて考えていただくと、中に入っていくやすいかなと思います。現場の教師も、すごく大変なお仕事だということを知るので、教師をめざしている学生さんには頭が下がる思いですが、子どもや保護者との生の触れあいを一分一秒でも多くとっていただいて、表面だけでは出てこない裏の顔とか、嬉しさも喜びも悲しみも共感していただくと、そういった体験が教科書では絶対に得られない自信になると思います。たくさんの方に出会ってたくさん経験をすると、たくさんいい先生が生まれるのではないかと期待しています。

## 全体まとめ

**平塚（司会）** ありがとうございます。すでに終了時間を延長していますので、最後にパネラーの方たちに、本当に一言ずつになってしまうのですが、ご質問への応答やご感想などをお話しいただいて、最後に尾木先生にこのパネルディスカッションのまとめとシンポジウム閉会のご挨拶を一緒にいただこうと思います。

**石川** まず、怪我が心配じゃないのかということでしたけれども、子どもがすごく楽しくて自分から自発的にやろうとしているときには、怪我はほとんどないし、受けた傷は自分で引き受けます。それに対して苦情はないです。子どもが本当に発散して満足して家に帰

ったときに、子どもが足から血を出していても、親は怒りません。だからプレーパークのことで私のところに親から苦情が来たことは一度もありません。

放課後子ども教室のほうは、学校は自然ではなくつくられた場所なので、子どもはやっぱり無茶したくなってしまうんですね。だからガラスを割った子もいましたし、なぜか頭をずりつと鉄棒で擦りむいちゃう子もいました。でも、そういう怪我が心配だからやらせないのではなくて、子どもに体験させるほうがすごく大事です。治る過程というのは、子ども自身が自分で見ていかなければわからないことなんです。怪我をしちゃだめ、あれもこれもしちゃだめって言って、そのまま大

人になったら、その子は本当にかわいそうとか、逆に危ないと思います。だから、怪我が怖いと思ってやらせてほしい。私は、子どもが怪我をしたら病院に付き添うとか、保護者にはきちんと説明して最後まで寄り添い、説明を求められれば説明をするとか、仲間とそうやって話し合ってきました。

それから、モンスターペアレントから何かなかったかということですが、私も一保護者です、あなたと対等ですということで、きちんと立場を明確にします。もちろん私は好きでやっていることですから、やってあげていますという態度を取るつもりは全くありません。ただ、学校の先生に対しては強硬に出る保護者も、やってくれてありがとう、仲間に対しては言葉をくれます。だから、モンスターペアレントがどうということも今までないです。もし問題が起きたとしても、地域につながりがたくさんあって友達がたくさんいれば、何か問題が起きた人との間に仲間が入ってくれます。そうやって地域のつながりが安全網のように、助けてくれるので、つながりをたくさんつくっておくことはすごく大事だと思います。

**石野** 私は教育の専門家ではないので、あくまでコーディネータという立場から見たときにこう感じますというお話なんですけれども、いま「学生ボランティアが欲しい」という依頼がきっかけで関わりのある小中学校が20くらいあるかと思うのですが、その中で接していて明らかに地域に開かれている、保護者や子どもたちとの関係が相対的に上手くいっている学校と、必ずしもそうでない学校があるんですね。それは現場に行った学生の目から見てもそう見えるということなのですが。

その中で、上手くいっていると思うところの共通点は何かということで、いま突然閃いたのは、そういえば、そういう学校って、保護者や地域の方々がむしろ先生をサポートし

ていく目線で回っているなど思ったんですね。何か問題があったときに、それに対しての原因をクレームという形で発するかどうか。あるいは、学校側にある意味では変えられない事情があったときに、その問題を解決するのは学校や先生という「あなた」ではなくて、私たち親や地域の住民も当事者である「わたし」として、自分も解決できる場所は解決する側に回らないといけないんだということに気付くかどうかには違いがあると、3年半の間ですけれども見ていて感じました。学校の先生たちが、クレームを怖がって現場のリアリティを全て開き切らないと、住民側は疑心暗鬼になってしまうところがあります。上手く変わっていった学校を見ると、先生が恐れずに自分の駄目なところや現状をも見せていて、その中で地域の方々が「じゃあ私はこういうことができるよ」とか、「うちのおじいちゃんおばあちゃんが実は暇だから、子どもと一緒に図書館整理できるよ」というふうに、役割を自分たちで見つけながら助け合うということが生まれているように思います。

もう一つは、そういうことが地域の中で起こることはもちろん必要なんですけれども、どうしても両者の利害の中でコンフリクトが発生したままの場合は、やはり間を取り持つような人というのが必要だと思います。先ほどシステムという言葉がありましたが、簡単にできる仕組みとしても、そういう方を置くことはできるのかなと思いました。最後に、先ほどの事例に出てきたBくん。あの子ども結局学校の中で埋もれてしまった問題だったのが、思いも寄らない全然別の角度からポンと、ある意味救ってあげるような、手が差し伸べられた事例だと思うんです。そのように、学校の現場の中だけで解決しなければというふうに保護者も先生も子どもも自身も近視眼的にならず、色々な角度からの可能性を実践していくことが普通になっていったら、とてもいいんじゃないかなと思いました。

**篠崎** 障がい名で人を見ないっていつも思っているんです。もしその人がとても困っていたら皆でサポートはするけれども、その人がどういうふうに生きていくかということは、誰も奪うことはできないと思っています。いま色々な保護者の方々が言うてくださったことは、教師であってもなくても、ずっと心に留めておきたいことだと思います。先ほど鬱になった先生の話が出ましたが、とても辛かったことを話してくださった先生の勇気に感動します。そしてその体験から何かを学びとってほしいという願いも感じます。孤立してしまうことは本当に辛い。自分を責めて追い込まれてしまうのだと思います。

でも、今日これだけの方が集まってくださって、腹を割って話したら少しわかりますよね、お互いの立場とか心づもりとか。全部が全部上手くいっているとは言いませんし、私も色々な失敗をしてきていますが、その失敗を言える場があれば、前進していくという感じがしています。だから、やっぱり仲間がほしいです。教師の職場集団もそうですが、職場の中だけで何とかしようとするのではなく、地域の力を借りたり医療の力を借りたりして、この一人の人をサポートするにはどういう力が必要なのかを分析して皆で知恵を出し合っていく。そういうお話が今日はいっぱいあったので、すごく元気が出てきました。現場は大変ですよ、本当に厳しいです。でもそれで逃げちゃいけないと私は思っています。だから今回は、声を上げて手を結ぶ人たちと、皆がどうやったら幸せになるかなということを考える、そういう出発の会だったと思います。

**尾木** 皆さん遅い時間までありがとうございます。こんな素敵なシンポジウムを開催できて、教職課程センターもこの4月の発足から、パワーが出てきたなと感じています。ここまでずっと地域とともに育つ教員養成とい

うことで考えてきたんですけれども、結論だけ言うと、僕はたくさんの学校を回っていますけれども、学校のどこに違いがあるのかということ、その違いは一点です、何かということ、「地域の風が吹いているか」ということです。先ほど先生が現場は本当に大変だとおっしゃっていましたが、そこでがんばっても展望は全く出ません。地域に目を向ける余裕がないよという気持ちも、ものすごくよくわかる。わかるんだけど、地域に目を向けたほうが解決は早い。一気に解決します。校長先生や色々な先生方が地域に目を向けていく、地域とともに歩む、地域に育ててもらう学校になったほうが楽なんです。

我が国は学校システム自体が非常に歪んでいて、たとえば学校で問題が起きると学校問題解決支援チームをつくりましょうと文科省が言うわけですね。あちこちに支援チームをつくっているんですよ。そのチームの編成がおかしいのね、元学校長、精神科医、それからなぜか知らないけど、元警察官(笑)。本当にばかげているんですよ、そんなことに税金いっぱい投入しているわけ。地域とともに育つ教員養成というのは、地域とともに育つ学校なんです。これができている学校というのは本当に素晴らしいです。先生方に余裕ができてきますので、教師が共感的な生徒指導ができる。そうすると子どもたちは本当にまるやかに育つんです。地域の学生やおじさん・おばさんがうようよしているような学校、そうなったときに教師は本当に解放されます。鬱になりようがないんです。

政府の政策は基本的に学校選択の自由とか、競争させて学力も生活力も上げるんだという方向に進んでいます。けれども、これは完全に破綻しています。学校の校長先生は、親は消費者、学校教育は消費者へのサービスと捉えている。つい3、4年前まで、東京の校長先生たちは保護者のことを顧客と呼んでいました。これが流行っていたんですけれども、

これは全然違います。地域に目を向けられる教員をどう育てていくかというのは、ヨーロッパ諸国でいう学校の「つくり手」になっていく、その入り口に来ていると思うんです。私たちがいま考えてきたことは、学校づくりの力量を私たちがつけ始めてきたということです。これが全国展開されれば全国に無数にできるわけですよ。

ご承知のようにオランダでは200人集めれば誰でも学校を開くことができます。我が国は憲法上に学校設立の自由がないんですよ。学校法人と都道府県・市区町村ということになっていて、国家に支配されなくちゃならない。でも、我々が好きな学校をつくって行って当然なんですよ。たとえばデンマークなんか28人集めれば学校はつくれるし、75%は国が財政支援をする。オランダの財政支援は100%です。これは当然のことなんです。多様な学校があって、多様な人間がいて、そういう学校が無数にできる中で活力が出てくるし、人間的で感性豊かな人がいっぱい育つわけでしょう。だから、我が国がどうしたらそういう方向に一步進んでいくことができるかという、その鼓動が始まったという感じがしましたし、地域だけではなくて、今後の日本の学校づくりがどう展開されていくのかということにつながる展望を持てたと思います。今日は遅くまでありがとうございました。

法政大学教職課程センター開設記念多摩シンポジウム  
「地域とともに育つ教員養成をめざして」

HOSEI

11/16<sup>2012</sup> Fri.  
17:00 ~ 19:30  
(16:30 受付開始)

法政大学 多摩キャンパス7号館  
大教室B棟 B301教室

参加費：無料

ミニ講演「地域とともに育つ子ども・教師・学校」  
—尾木直樹（法政大学教職課程センター長）—

パネルディスカッション「これからの学校・教師・地域社会」

●パネリスト●

篠崎純子さん（相模原市公立小学校元教諭）

石川ゆかりさん（八王子市市民・保護者）

石野由香里（法政大学多摩ボランティアセンター・コーディネータ）

尾木直樹（法政大学教職課程センター長）

●コーディネータ●

平塚真樹（法政大学社会学部教授）



“尾木ママ”と、  
教育について語りませんか。

—お申込み方法—

【一般 / 卒業生の方】 事前申込不要

【法政大学学部生 / 大学院生の方】 各キャンパス下記窓口へ

多摩キャンパス 教職課程センター多摩相談室（総合棟2階）

市ヶ谷キャンパス 教職課程センター（富士見坂校舎3階）

小金井キャンパス 理工学部事務窓口

●交通アクセス●

【京王線】新宿駅から準特急で40分（急行で50分）、めじろ台駅下車、バスで約10分

【JR線】中央線：新宿駅から快速で54分（特別快速で42分）、西八王子駅下車、バスで約20分

【JR線】横須線：新横浜駅から38分、相模駅下車、バスで約15分

\*上記各バスで「法政大学」下車

\*校内に駐車スペースはございますが、会場まで徒歩で少しかかります。

（ポスター制作 社会学部1年 田口智章）

主催 法政大学教職課程センター

お問い合わせ TEL.03-3264-5562 受付：月～金曜日 10:00～18:00

（市ヶ谷）〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

（多摩）〒194-0298 東京都町田市相原町 4342

た  
ま  
ま  
か  
た  
ら  
り  
っ